

教養部会准教授 森田 裕之

1. 研究活動

<p>論文「生成変化を思考することの教育学的意味—ドゥルーズ＝ガタリの生成変化のシステム論にもとづいて」</p>	<p>2014. 3</p>	<p>『名古屋芸術大学研究紀要』第35巻</p>	<p>凡庸な画家ファン・ゴッホはアルドで突如として、燃え上がるように情熱的な独自の画風を確立し、狂気に憑かれながら数々の傑作を描き上げることのできる芸術家に生成変化した。教育学に馴染みの発達とは異質なこの生成変化は、これまで教育学によって問われることがなかった。しかし本稿では、こうした生成変化を教育学として考えることが、従来の教育学的思考を揺さぶり、新たに変容させることを、ドゥルーズ＝ガタリに依拠して示した。</p>
<p>論文「芥川晩年における不思議の環という基本構造—ドゥルーズ＝ガタリの理論にもとづいた『歯車』分析を中心として」</p>	<p>2014. 3</p>	<p>『名古屋芸術大学人間発達研究所年報』第3巻</p>	<p>本稿の目的は、発達とともに重要な変容である生成変化が死とどんな関係にあるかを明らかにすることである。そのために、ドゥルーズ＝ガタリの理論にもとづき、芥川龍之介の「歯車」に描かれたドッペルゲンガー現象について考察した。その考察に依拠するとき、「歯車」は狂気への生成変化と死とをループ状に結んでいる不思議の環を基本構造としていくことが明らかになる。この基本構造は芥川晩年の他のテキストの中にも見出すことができる。</p>
<p>論文「微粒子と記号の変容論」</p>	<p>2014. 3</p>	<p>『名古屋芸術大学人間発達研究所年報』第3巻</p>	<p>本稿では、論文「生成変化を思考することの教育学的意味」で行った生成変化と発達と生成という諸変容の理論化と、論文「芥川晩年における不思議の環という基本構造」で行った生成変化と死という諸変容に関する理論的考察とを総合することによって、微粒子と記号の変容論を構築した。それは、自然を諸微粒子の運動として、社会を諸記号の運動として捉える理論であり、生成変化と発達と生成と死という四つの変容の絡み合いを内包している。</p>

<p>論文「保育所実習指導に関する研究—実習教育のあり方の検討」</p>	<p>2014. 3</p>	<p>『名古屋芸術大学人間発達研究所年報』第3巻</p>	<p>本稿では、保育所実習および実習指導の内容の充実、実習教育の質的向上のために、2013年度の保育所実習 I を終えた名古屋芸術大学の実習生にアンケートを実施し、その結果から実習に関する課題、指導のあり方等を検討した。調査結果から実習生の課題として、保育者の基本的視点を捉え直す必要性、記録の書き方の基礎的理解の必要性、子どもの視点に立ち多様な保育技術を展開できる力の獲得等が挙げられる。 第2章を担当。 共著者：吉村美由紀、鈴木岩雄、<u>森田裕之</u>、渡邊美和子</p>
--------------------------------------	----------------	------------------------------	--

2. 教育活動（教育実践上の主な業績）

大学院授業担当 有 無

3. 学会等および社会における主な活動